

(1) 単元名：心のつながりを読む 「お手がみ」

(2) 本時の目標：本文の挿絵から、かえるくんやがまくんの気持ちを読み取る。

☆本資料に出てくる子どもの名前は全て仮名である。



午前中にH先生の授業を参観させてもらい、給食を一緒に頂くことになった。5校時はこの子達と「おてがみ」で「学び合い」である。すでにいい空気である。

平成23年、24年度の村をあげての「学びの共同体」理念による実践のために、モデルとなる教室(教師)を探していたとき、N先生の算数の授業(地区指導主事招聘授業研)を参観させてもらった。私はそのとき背中に電気が走るような衝撃を決して忘れることができない。「しっとりした授業」ってどんなイメージ。上手く頭に描くことができない状況の自分でもあった。それまで、学びの本やDVDでしか見たことのないしっとりとした授業、穏やかな教室の空気、やはりDVDや本では感じることでできないものがあつた。しかし灯台下暗し、こんな近くにこんなステキな授業が当たり前実践されていることにうれしい衝撃を受けた。

まず、教室の空気である。しっとり信頼と安心に包まれたなんとも言いようのない教室の空気である。次に「聴き合う」授業づくりである。教師の発言はそこそこに、子どもの声を最大限に尊重し、授業が進められていることであつた。教師はうなずきながら「そう」「なんでかな～?」「○○さんは?」、教師のニコニコした笑顔が子ども達にそのまま映し出される目指す「学び合いの教室」はこれだと勝手にうれしくなり、23年度内に何度か授業を拝見させていただいた経緯がある。



写真①、本時の学習スタイルである。安波小では3/5年のH先生の授業も同じスタイルで進められている。写真②は、前時までの資料である。学習中の振り返りや「もどす」に大いに役立つ。本日は左手小から校長含め3名、安田小から1名の先生方が、授業研究会に参加してくれた。村内の先生方の交流校内研修の日常化がほんとにうれしい。村内のすべての先生方が、一つの授業理念でつながることは大変意義深く画期的であると考える。

2:00 静かに授業開始・・・ほのぼの笑顔である。決して身構えなく自然である。



まずは読む。はじめ各々音読、読みの力には必ず差がある。少しでも読みを深めようと思うなら、やはり自分のペースで読むことを大切にしたい。時々、個人指名の範読(音読)を入れると授業に変化があり、指名されて読むことへ関心を抱き自分なりの読みの練習への取り組みが期待できると言う。

本時は、各々読みから始まり、指名読み(全員)計5回、文章をなぞることになる。子ども達は飽きることなく「何かを見つけよう」「何かを感じよう」とテキストに集中して向かう。「何か気づく・何か感じる・見つける・なんで?」の視点で読ませる

2:09 思ったこと・気づいたことの共有である。



早速、めぐさんが教師に向けてここまでのお話のストーリーを勝手にふり返り話す。言葉もたどたどしくまとめきれないが、必死に教師に向けて語られる。教師はうなずくだけである。話し終わった後、めぐさんの顔に笑みがこぼれる。

さくら：「しんあいなる」ってどういう意味？

：とってもなかよしいっていいかな？

教師：そうだね、とっても仲良しくて意味かもしれないね

さくら：でもなんで手がみ書いたのかな？

ゆうか：がまくんをうれしくさせたかったから？

めぐ：だって一度も手がみもらったことないから……

1年生の段階では、子どもの対話が突然飛んで、対話が途切れたり、つながらなかつたりすることは多々ある。その時、教師がどのような対応で話を戻すかである。常に心構えておかないと、その状況になって、教師がうろたえたと子ども達の学びが途切れてしまう原因になりやすい。しかし安波小の子ども達は、お互いの話しをよく聴いているので、とんでもないところに話が飛ぶと言うことがまったくない。日常の「聴き合う」が伺える。たどたどしいお話も、まったく嫌な顔せずしっかり聴いてあげている。一番「話を分かってとして聴いている」のはやはり手本となる教師であつた。

2:15 さくらさんの疑問から



さくら：なんで「ぼくがお手がみかいたんだ」って言っちゃたんだらう。  
 ゆうか：きつとがまんできずに言っちゃたんじゃないかなあ  
 さくら：おもわず言っちゃった？  
 教師：思わず言っちゃったかえるになって読んでみようか。  
 全員音読「だって ぼくが きみに 手がみ 出したんだも。」  
 よしと：うれしいことはこっそり教えたくなるから言っちゃった。  
 さくら：かえる君もほっとしたと思う。  
 話したいことを、黙っていることはきつとつらいことだから  
 かえるくんは、言ってしまうからほっとしたと思う。

さくらさんは自分から投げた疑問だが、学びの末には、「かえるくんはほっとしたと思う。」という見解に行き着いた。さて、この場面から「ほっとした」と言う言葉が簡単に出るだろうか？周りの仲間もさくらさんの見解をうなずきながら聴き入っていた。すばらしいの一言。さらに、この対話の間にセリフの読みを入れた教師のタイミングも絶妙だった。ある意味「テーマにもどす」である。

2:18 教師：お手紙のどこがよかったんだらう？



ゆうか：ぼくは、きみがぼくのしんゆうであることを うれしくおもっています。  
 教師：どんなお手紙書いたんだらう。お手紙をみんなで読んでみよう。  
 全員音読「ぼくはこうかいたんだ・・・しんゆう かえる。」  
 教師：どんな気持ちで書いたんだらう。  
 めぐ：がまがえるくんをうれしくさせるために書いたと思う。  
 教師：がまくんの「ああ、」を言ってみよう。  
 全員音読「ああ、」 →感情がこもる。ニコニコしている。  
 ゆうか：うれしいきもちで「ああ、」  
 よしと：(一)の場面のポストを眺める様子と、何度も見比べて。  
 がっかりの「ああ、」じゃなくてうれしい気持ち  
 (一)の場面と気持ちが変わっている。

教師は、学びの途中に意図的に何度かキーワードとなる文章や会話を音読させている。子ども達が話のテーマからそれないように、また、更なる読みを深めるためにも、有効的な手段である。

2:20 かたつむりくん

この話の深まりと、楽しさをかたつむりくんが背負っている。このお話で、かたつむりくんをどうあつかうか？教師の個性やアイデアが思い存分楽しめるところだと思う。子ども達と教師とテキスト3つの楽しむを大いに感じてほしい。安波小で出た言葉です。



：なんでかたつむりくんに・・・  
 ：かたつむりくんはまだやってきません  
 3回もあることはほんとに速く来てほしいから  
 ：かたつむりくんのことを心配している  
 ：「きつとくる」はかたつむり君を信じている

2:37 (一)の場面との気持ちの変化について

(一)の場面の玄関に座っている二人と(四)の場面の玄関の前に座る二人  
 よしと：挿絵を必死に見比べている。顔の様子や、肩を組んでいるなどから、幸せな気分をとらえる。  
 さくら：P108の「かなしい気分」とP116「しあわせな気持ちで」をとりあげ気持ちの明らかな変化をおさえている。

挿絵の活用は大切である。物語にせよ説明文にせよ。無駄な挿絵や図はありえないと考えてよい。よく挿絵の登場人物に吹き出して声を入れることがあるが、いろいろな活用方法を研究してほしい。



2:39 教師：気持ちを考えながらみんなで音読してみよう。

※ 明らかに当初の読みとは違っている。子ども達の気持ちがとくにこもったがまくんのセリフです。

「でも、きや しないよ」「きつと くるよ」「きみが」「ああ、」「とても いい 手がみだ。」

この場面で、「ああ、」をどう読むか(発声するか)で子ども達の本時での読みへの深まりが理解できるような気がする。子どもの読みを教師は淡々と小さな笑顔で聴いていた。

2:40 教師：(四)の場面の中から好きなところは

さくら：「とっても いい 手がみだ。」  
 ゆうか：「きつとくるよ だって ぼくが お手紙出したんだもの。」  
 めぐ：二人とも とても しあわせなきもちで すわっていました。  
 よしと：「だって ぼくが お手紙出したんだもの。」

◎ 上手く言えないけど何でも話したいめぐさん。ぎもん探しが好きなさくらさん。じっくり考えて的確に話したいゆうかさん。複式の先輩として後輩にゆずってあげるナイーブなよしとさん。

▲ 一人で、ペアでじっくり考える機会も時には取り入れたらいいかな？ ステキな授業ありがとう。

国頭学びの会ゆい